



師走を迎え今年も残すところあと1か月となりました。冬休みやクリスマス、そして、お正月も間近です。さて、博物館では1月2日(木)より冬の特別展「博物館のお正月 2025 ～お正月をさぐる～」を開催します。多くの皆様のご来館をお待ちしています。

博物館のお正月 2025 ～お正月をさぐる～



令和7年1月2日(木)～令和7年2月2日(日)

日本では古くから、お正月に「特別なもの」をかざったり食べたりしてきました。今回の展示会では、それら「特別なもの」をとおり、わたしたちがお正月をどうとらえてきたのかを、「なぜ」と「なに」をキーワードに探ります。お正月の遊びであるコマ回しを体験いただけるコーナーもあります。

会期中は無休!
常設展入場券のみで観覧できます。



羽子板



十二支土鈴 (黒川勉コレクション)



九州各地のコマ

体験プログラム紹介!

博物館では、様々な体験活動ができるプログラムを準備しています。



化石発掘(400円)



化石レプリカ(250円)



ペットボトル顕微鏡(250円)



勾玉(250円)



古代の鏡(250円)



古銭(250円)

- 団体限定で、平日に行われます。
 - 体験時間はどれも1時間です。
 - 事前のお申込が必ず要です。
 - 令和7年度より料金が改定となります。
- 250円→350円
400円→450円



ミュージアムのタネ



チョウとガについて

「チョウとガ」は同じグループの昆虫で、翅に鱗粉をもつことから鱗翅目と呼ばれています。これまでに分かっているだけで、世界中で16万種が知られており、名前がついていないものを含め推定50万種とも言われます。鱗翅目はチョウ目とも呼ばれますが、チョウとガの種数を比較した場合、チョウよりもガの方が圧倒的に多いです。例えば、日本のチョウは台風などで飛んできた偶産種を含めても300種を超える程度ですが、ガは5000種を超えています。

チョウとガの特徴となる鱗粉は毛が変形したもので、肉眼では粉のように見えますが、拡大してみると、一つ一つは細長い花びらのような形をしています。この鱗粉の配列によって、チョウやガの色彩ができあがっています。色素をもつ鱗粉による色と、鱗粉の微細構造による色があります。また、特徴として有名なのはストロー状の口(口吻)です。昆虫の多くは「噛む」口ですが、鱗翅目の多くは口器が変化し、「吸う」口になっています。一方で、一部の原始的な特徴を残した種では「吸う」口が発達しておらず、「噛む」口を残しています。

鱗翅目の中のセセリチョウ上科、アゲハチョウ上科、シャクガモドキ上科を合わせたものがチョウと呼ばれています。チョウは派手で、ガは地味なものが多いと呼ばれますが、地味か否かは見る人によって違いますし、昼に飛ぶガの中には派手な色彩(写真はニューギニアのシャクガの仲間)をしたものがあります。鱗翅目は多様なため、全ての種に当てはまる見分け方はないのですが、前後の翅の形や翅脈の形、触角の形などが識別点と考えられています。ですが、身近なところでは、昼間に活動すること、触角の先だけが少し膨らんでいること、翅を立てて閉じること、胴体が細い(セセリチョウは太いです)ことなどでおおよそ見分けることができます。

シャクガのなかま



ルンシミン

